

【巻頭随想】

日本ブドウ・ワイン学会2023名古屋大会に寄せて

中尾 義則

名城大学農学部

On the Occasion of ASEV JAPAN 2023 Annual Meeting in NAGOYA

Yoshinori NAKAO

Faculty of Agriculture, Meijo University

日本ブドウ・ワイン学会2023名古屋大会が名城大学（名古屋市）での開催になりました。東海地域で初めての開催であり、皆様を愛知県にお迎えできることを嬉しく思っています。2020年は名古屋大会の予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の拡大による警戒が始まり対面からオンラインでの大会に変更となりました。そして、2023年になって感染症の警戒が緩和されたことを受け、開催候補地として再び推薦いただきました。この3年間の大会は、実行委員と事務局の方々が開催について議論され、これまでと違ったオンラインでの開催となりました。その準備には苦労が多かったはずであり、改めて感謝を申し上げます。オンライン大会の成功は関係者のご尽力の証であり、それに続く本大会の開催地がこの名古屋となっていることに身が引き締まる思いです。

この3年間を振り返ると世界中が生活環境の変化への対応に追われながらも乗り切ってきました。この間にオンラインでの会議などの聴講システムが普及し、本学会の関連分野でも遠隔地や海外に行かずともブドウやワインに関する研究や報告を聴講できたことは非常に有意義でした。日本ブドウ・ワイン学会のオンライン大会を振り返ると、「それぞれの発表を振り返って聴くことができ理解が深まった」や「週末の2日間だけではなく都合の良い時間

で聴くことができ聞き逃しがなかった」などの良い意見もありました。そして今は警戒緩和という新たな変化に追われている状況です。古くから続くブドウ産地の栽培者はこれまで培ってきた数々の技術で栽培環境の変化に対応しながら生産をしています。産官学の研究機関や栽培者は、気象変動に伴う果実の着色不良や果粒品質の変動などの対策も視野に入れながら研究を続けています。我々の研究と産業の分野は地球環境や消費動向など多くの変動要因に対処できるよう、新旧の技術の融合によって成り立っている分野だと思います。本学会も新旧を融合させ変化しながら発展を続けることができればと思っています。

2020年の巻頭言の繰り返しになりますが、愛知県は農業県でもあり農業総産出額は国内8位です。愛知県は暖地ゆえにブドウ栽培の苦労はありますが、生食用ブドウを中心に国内9位の生産量があります（2019年）。ところが、ワインの生産量は少なく、東海地方4県を合わせても661 kLです（2018年）。また、愛知県のワインの一人あたりの年間消費量は10位以下となっています。日本ブドウ・ワイン学会はブドウ学、醸造学および経済学などが一体となった幅広い領域をつなぐ学会で、日本のブドウ栽培とワイン産業に果たす役割は大きいです。本大会が愛知県で開催されることで東海地方のブドウとワインに

関する研究と生産技術の発展，そして消費の活性化にもつながればと思います．皆様の参加が有意義になるようにお力添えいたします．